

社会的攻撃性 social aggression についての シンボリック相互作用論的研究

——研究の経緯と予備調査の結果

後藤 将之

はじめに

21世紀になって、対人的な攻撃行動の研究領域で、ひとつの新しい動向がみられる。その動向はいろいろな名称で呼ばれているが、具体的には、female aggression, girls' aggression, alternative aggression, relational aggression, latent aggression, indirect aggression, social aggression など、多数の呼称が用いられている。それぞれ、女性の攻撃性、女子の攻撃性、代替的攻撃性、関係(性)攻撃性、潜在(的)攻撃性、間接(的)攻撃性、社会(的)攻撃性、などの和訳があてられることが多い。この領域の研究は、先駆的な90年代前後の研究例がすでに存在したものの、ある程度まとまった研究動向としては、2000年代に入って以後、本格的に展開されるようになったようだ。

上のような呼称の多さとそれらの含意とが、そのまま、この研究領域の特徴を定義するものにもなっている。すなわち、これらの研究が対象としているのは、(1)殴る・蹴るといった物理的な攻撃性ではない、いっそう表立たない、なんらかの間接的な攻撃性の事例である。より具体的には、直接に相手の身体などを攻撃するのではなく、相手との間での情報やコミュニケーションを操作す

ることによって、相手に対して心理的なダメージを与えるタイプの攻撃性である。実例としては、かげ口をいう、村八分にする、必須の情報を伝えない、人間関係に秘かに介入し操作する、などの、「ソフトないじめ」行動である。また、(2)これらの攻撃性は、物理的・顕在的な攻撃性が社会からある程度まで認知されている男性・男子ではなく、それがあまり望ましいものとは受け入れられず、むしろ「いつでもニコニコした好人」であることを期待されがちとされる女性・女子において、物理的な攻撃行動が社会心理的に抑止されている結果として、発露するといわれる。したがって、このような攻撃行動の主たるエージェントは女性・女子であるとされる。

以上の特性から判断して、この研究領域は、たとえば教育研究における「いじめ」問題の文脈や、発達心理学などにおける子どもの対人行動研究といった文脈以外にも、コミュニケーション研究における対人コミュニケーション過程の分析や、流言研究におけるデマ被害の分析など、いわゆるコミュニケーション論的な側面からのアプローチにとっても適合的なものと考えられる。その際の研究手法は、心理学的というよりも、いっそう社会的かつマクロな視点と方法に依拠したも

のとなるだろう。

筆者は、この研究領域について、たまたま2003年前後に知り、以後、散発的にはあるが、学部の卒論指導や、大学院のゼミにおいて、学生とともに検討してきた。今回、機会を得たので、関連する先行研究の調査を行い、予備的な段階ながら、その実態についての簡単な社会調査を実施した。以下ではその結果を報告する。

なお、この研究領域については、上述のような複数の呼称が現状でも混在して使用されている。研究開始後しばらく経過しているので、研究領域を概観したレビュー論文も刊行されるようになってきているが、それらの代表例の中でも用法は一定していない。たとえば、Putallaz and Bierman (2004)では、他に加えて relational aggression が用いられることが多く、この領域での先駆的な業績を残している Crick (2008 等) は、もっぱら relational aggression を用いており、Underwood (2003) によるレビュー論文では social aggression が使用されている。本研究は、平成23年度成城大学特別研究助成（1年間）を受けて実施された。本研究では当初、潜在的攻撃性 latent aggression という表現を使用する計画であったが、実際に社会調査を実施した結果から判断して、社会的攻撃性 social aggression を用語として採用することに変更した。そもそも呼称自体がそれほど確定されていない状態での研究開始であったため、この点については理解されたい。呼称の問題に関しては、以下でも触れる。

1. 本研究の経緯

筆者は、2003年7月に、興味深いテーマとタイトルをもった新刊ハードカバーの洋書を入手した（この年月は、ネット書店の購入記録に記録されている）。Rachel Simmons, *Odd Girl Out: The*

Hidden Culture of Aggression in Girls (2002) という書物で、女子における、隠れた、沈黙の攻撃行動について記された初めての本、といったふれこみだった。著者シモンズが、米国ヴァッサー・カレッジ卒業後、ローズ奨学金を受けて、英国オックスフォード大学大学院にて女性の攻撃性について研究した、という略歴紹介からも、ある程度、堅実な内容であるように予想された。

さっそく内容を検討したところ、同書がいわば「新しい研究ジャンルの発見」を主張していることが判明した。すなわち同書では、女性（とりわけここでは、女子学生や若い女性）における、主として人間関係を故意に操作することを通じた、かげ口、悪いうわさの流布、社会的な無視や黙殺などなど、物理的ではなく表立たない、各種の攻撃行動の存在を主張し、その研究の必要を説いていた。また著者は、実際に、数百人への各種インタビュー調査に基づいて、そのような隠れた攻撃行動の実態を、リアルに記述していた。

その時点で、筆者は、すでに20年近く、さまざまな大学で講義を続けてきており、教室内での出来事については、ある程度の個人的な知見を持っていた。また、筆者は大学問題の専門家ではないが、*Generation X Goes to College* (1996, 邦訳2000) という、現代アメリカを事例とした大学生の現状についての洋書を、すでに翻訳紹介してもいた。これらのことから、ある程度まで、このテーマについても、印象をもつことができた。本書を最初に手にした時の個人的な感想は、「ついにこういう研究が出てきたか」というものだった。これは、とりわけ90年代後半の大学キャンパス内や教室内での動向に敏感であれば、それまで存在しなかったのが不思議なくらいのテーマだった。

類似の動向については、たとえば現役の大学生

の間でも、何か察知されるところがあったらしく、ちょうど本書を検討している時に、当時の学部生から、同じテーマでの卒論執筆の希望が出された。その希望に対応する形で、このテーマでの卒論指導を行った。当該の卒業論文は、筆者のゼミにて指導され、2003年度に提出されている(早瀬, 2003)。

その後も、何回か、卒論指導や大学院の指導にて、類似のテーマの研究業績を紹介し、検討する機会があった。そして、2010年度の大学院ゼミにて、このテーマでのいくつかの研究書を紹介したところ、大学院生がある程度の興味を示した。筆者自身は、これまで、性別的に言ってさほど直接の当事者ではないので、授業等での研究紹介に止めていたが、ゼミでの関心の高まりを受けて、翌2011年度を利用し、このテーマでの大学院レベルでの小規模な社会調査を大学院生と実施することになった。

2. 研究の歴史とアプローチの多様性

ひとくちにこのようなタイプの攻撃性の研究といっても、実際には、大別して2種類の人々によって、行われているようだ。第一に、心理学的な傾向が強い、発達心理学、青年心理学、教育心理学などからのアプローチである。第二に、しばしば親向けまたは同種の被害者・経験者向けの一般書として書かれる、教育家や教育アドバイザーなどによるアプローチである。後者は学術書としてはややソフトなものがままあるが、体験者や被害者の生の声や具体的な事例描写は参考になる。ちなみに、筆者がはじめにこの領域を知った Simmons (2002) は、著者のオックスフォード大学大学院での研究を基礎にしているという意味では学術的研究であろうが、結果として出版された書物そのものは、学術研究として評価しうる範

囲内での一般向け書物といった出版物だった(同書には、詳細な註、文献目録および索引が付されていた)。2002年段階で、この研究領域について明示的に主題的に論じた書物はまだ多くないので、少なくともその意味での先進性はみられたといえよう。

1) 心理学的アプローチにみられる傾向

まず、上記の第一のアプローチは、典型的には心理学的手法に依拠したものが多く、その代表例は、Putallaz and Bierman (2004) などに掲載、紹介されている。同書は、13の個別論文と、2つの政策的・予防的な提言論文からなるが、個別論文では、基礎論的な論文に続いて、児童期、思春期、成年期と、発達段階をおって女性の攻撃性的実態を検討している。そのすべてをここで検討はできないが、いずれもある程度心理学寄りのアプローチに依拠したものといえる。

具体例を紹介すれば、同書に収録されたニッキー・クリックと協力者による論文がある。クリックは、90年代前半から、児童における関係攻撃を研究していた発達心理学の研究者であるが、彼らがここに寄稿している論文は、児童期初期というか幼児期における関係攻撃性の存在を検討したものである。

クリックらによれば、初期の関係攻撃の研究では、未就学期にそれがどのように現れるかに関心をもっていた。研究のこの時点では、まだ、2歳半前の子供を対象とした研究はなかった。その後、この時期においても、あまり洗練されていない関係攻撃性が存在することが発見された。比較的単純で、具体的な行動(「何々しないと、パーティに呼ばないよ」などと友人に告げる行動等)がそれである。児童期の初期では、関係攻撃は、子供の認知・言語・社会能力を反映して、こ

のように直接的である。しかし、最近の研究では、未就学時点でも、初歩的ながら、間接的な攻撃を開始していることが分かってきた。ゴシップやうわさの流布などが見られる。未就学期の、もうひとつの重要な関係攻撃の特徴は、直接の問題について、「それが起こったその時点で」発動することである。それは、「過去の悪いこと」への現状での反応というものではない。いつから子供が「悪意をもつ」（いわば根にもつ）ようになるか、つまり怒りや感情的不満を延期する能力を身につけるかの知見が必要である、という（Crick et al., 2004 から要約して引用）。

以上のように、同論文では、児童期初期といっても、ほとんど2~3歳児における関係攻撃の存在を指摘し、その研究の必要を説いている。ひとくちに関係攻撃と言っても、その実行者は、きわめて多岐にわたることがすでに判明しているようだ。

言うまでもなく、このような低年齢層への調査は、まだ言語能力の発達が不十分な場合もままあることから、きわめて難しい。もともと関係攻撃・社会的攻撃の場合、あからさまな物理的挙動を伴わない攻撃行動であるため、その探知したいが本質的に困難であるわけだが、低年齢層では、さらに、当事者の言語能力の未発達という問題がある。そのため、いまだに十分な調査が実施されていないとして、クリックらは、未就学児童における関係攻撃のアセスメントのための適切な技法を検討している。この部分は、直接に本論と関係するわけではないが、関係攻撃の心理学的研究における一般的な手法が分かりやすい、という意味で、以下に紹介する。

クリックらが紹介している先行研究や当人たちの研究で採用されているのは、観察法と子供向けインタビュー調査法の併用である。自然なセッ

ティングにおいて、焦点児童法を用いること（つまり特定児童に焦点を合わせた観察）は、教室や遊び場で用いられるこの手法のうち、もっとも簡単な方法であるという。具体的には、2、3ヶ月の期間、5~8回の個別セッションで、それぞれ10分区間で、焦点児童ひとりを観察してきている。これらの区間における、焦点児童からの攻撃と、相手が受けた犠牲化を記録している。多くの関係攻撃の行為は、言語的または微妙なものなので、会話を聞き取れる近所にいることが、これらの観察では必要となる。しかし、近接することは、子供たちの行動へ影響する可能性がある。ただし、観察実施前に相当量の時間を教室で過ごすなどして、参加者の反応を低下させる方法はある。ちなみに、このような未就学児童の観察報告は、教師からのそれとも有意に相関していたという。

これ以外の研究手法としては、子ども仲間の遊び環境で、相互作用を喚起し、それをビデオに録画して分析する手法が使われている。たとえば塗り絵というタスクにおいて、好まれる色のクレヨンが限定されるという状況を作ってそれを録画し、そこでの関係攻撃や物理攻撃をコード化して記録する。2~3名の集団での行動をもコード化して記録する、などの手法が使われている。

同様に、子供からの言語的な報告によって関係攻撃を特定化するピア・レイティング法やピア・ノミネーション法も使われている。友達を示す写真や絵などで助ければ、この年代の子供であっても、仲間に受け入れられているか、関係攻撃があったかどうか、などの構成的な概念について信頼できる情報が得られるとしている。これらは3歳児にはたやすく理解できるが、それ以下だと難しかったという。ここで得られたピア・レイティングは、その他の情報ともよく一致していた。

これらの他には、教員からの攻撃性と反社会行

動についての報告を、既存の尺度（PSBS-TF, PPVM-TF など）で分類する手法も用いられている。最後に、親からの報告も有効でありうるはずだが、この年齢層では、関係攻撃にかんする親からの報告はまだあまり検討されていない、とされる。

以上、概説的に紹介したように、ひとくちに関係攻撃の測定といっても、その具体的な手法は相当に多岐にわたっている。また、このような心理学的なアプローチにおいては、ピア関係についての自己報告の場合でも、ビデオ録画を用いた攻撃性の測定と分類などの場合でも、集団による関係攻撃というよりは、むしろ、個人と個人の間での、個々の攻撃行動の実例を重視した検討が行われる傾向があるようにみえる。まずミクロのダイアド関係から出発するのは、このアプローチでの方法論的には常道といえよう。ところで、社会的攻撃性のひとつの特徴は、一定の期間にわたり、1人の被害者に対して、複数人からなる集団が、かげ口や悪いウワサを流し、黙殺や無視などをするという、「持続的な集団行動」という点にみられるものであろう。精密な関係攻撃の測定という方向では、個々の攻撃行動の実際は詳細に記録され測定されるだろうが、このような集団論的な側面は、現状で、やや背後に後退する印象がある。

2) 実用的教育書にみられる傾向

続いて、上に示した第二のアプローチは、Thompson and Grace (2001), Simmons (2002), Wiseman (2002) など、親向けの教育書・一般書の体裁を取ったものが初期の代表例であろう。これらは「ニューヨーク・タイムズ」紙などのベストセラー・リストにも載ることが多く、啓発的な一般書として広く支持されていることを推測させる。後2者については、その後、邦訳も、比較

的早期に刊行されているようだ。また、上記のうちではトムスン&グレイスが最も早期のものであるが、同書は、題名にこの領域を明示する語句がなく、「子供の友人関係」論という広い文脈の中で、社会的攻撃性がトピックとして扱われている。このため、この意味では、シモンズおよびワイズマンの著作が、ほぼ同時期の、もっとも早期のこのような領域への、このタイプのアプローチの実例といえるだろう。この両名とも、著作の成功を受けて、その後、教育アドバイザーや教育家、評論家的な社会活動を展開するようになっており、その意味でも類似している。

シモンズの著書は、しばしば「女子の攻撃性について扱った最初の本」と呼ばれているが、その信憑性について筆者には確証がない。シモンズ自身は、著書の中で、先行研究は少数だったとしながらも、リン・マイケル・ブラウンらによる女性心理学・女子発達の研究 (Brown and Gilligan, 1992) を、影響を受けた研究として挙げている。だが、そのブラウン自身も、その後、女子のけんかについての著書 (2005) を書いている研究者である。総じて、広い意味でのこの領域は、90年代前後からアカデミックな研究が行われていたようだが、2000年代に入ってから、大量の類書が続々と刊行されるようになり、非常に活況を呈している。いわば、先行する学術研究が地道に蓄積された上で、ほぼ同時多発的に各方面で研究書が出版されてきたため、研究相互の明確な影響関係が特定しにくく、また、どの著作が先行していたのかもやや判然としない。

ただし、シモンズの著書は、相当程度まで広範に、この領域への関心を喚起するのに成功したという意味では、影響力の大きなものだったと言えるだろう。じっさい同書には、新領域発見の驚きについて、次のような多くの言及がある。

シモンズは、過去に自らが経験した女友達からのいじめ行為について、回顧的に考察する過程で、簡単なメール調査を思い立った。そして、「アメリカ国内の知り合い全員にEメールを送って、それを、できるだけ多くの女性へ転送してくれるように頼んだ。そこでは2、3の簡単な質問をただけだった。『かつて、他の女子から、苦しめられたり、からかわれたりしたことがありますか？どんなふうだったか説明してください。それは、今のあなたにどのように影響していますか？』。24時間以内に、私のメール受信箱は、アメリカ全土からの反応で溢れそうになった。女性たちが、否定しようのない感情的な激しさで、自分の話をサイバースペースへ向けて語りかけるにつれ、メッセージが積み上がっていった。PC画面上ですら、彼女たちの苦痛は、私のそれと同様に生々しく、しかも未解決のままに感じられた。私が一度も会ったことがない女性たちが、話を聞いてくれるのはあなたが最初です、と書いてきた。それというのも、そういう質問をしたのは私が最初だったからだ、と知ったのは、それからかなり経過してからだった」(Simmons, p. 2-3)。いささか劇的に描いているように感じられるが、実際のところ、この調査の時点では、まだ女子同士のいじめ類似行動については、あまり口外されないことも多かったのだろう。

次に、ワイズマンの著作は、やはり教育家・教育アドバイザー的な立場にある著者によるもので、シモンズの仕事と比較して、いっそう「いじめる側」の「役割分業」に焦点を合わせた著述となっている。主として思春期の女子の間のいじめの問題を考察している。

ワイズマンによれば、社会的攻撃を行う女子の徒党(クリーク)には、およそ以下のような役割分業があるとされる。同書にいう「ガールワール

ド」には、一定の固定的な役割の構成員がいる。すなわち、「女王蜂」「その副官」「情報屋」「浮遊者」「混乱した傍観者」「ご機嫌取り、女王蜂志願者、伝令」「標的」である。それぞれについて、簡単にみていく。

(1) 女王蜂：女王蜂は、カリスマ性、権力、金銭、ルックス、意志、裏工作によって、他の女子の上に君臨している。ひと睨みするだけで仲間を黙らせる。友人達は、彼女がしてほしいがることをする。クラスの他のどんな女子からも、怯えさせられない。他の女子たちはつまらないことを言っている、と不満をいう。大人にとっても魅力的にみえる。感情的だが、その感情は、他の女子を排斥するのに使われる(たとえば、気にいっている女子とは口をきくが、そうでない女子はまったく無視する)。他人を傷つけても責任はとらない。間違っていると言われたら、リベンジする権利があると考え、「目には目を」の世界観をもっている。

女王蜂は、自分の周囲に対する権力とコントロール力を感じている。注目の中心にいて人々から称賛される。

女王蜂は、本当の自己の感覚がもてない。自己イメージの維持に忙しすぎて、自己の感覚を見失う。自分の男女の友人について、とてもシニカルである。友人はお追従を言っているだけだと思っている。自分の娘が、女王蜂やその志願者である場合、絶対にこの表現を使ってはいけない。

(2) 副官：女王蜂の相棒は、副官であり、女王蜂の次に、2番目に指示を出す。どんなことがあっても女王蜂を支持する。というのも、女王蜂から得ている信頼によって、自分の権力があるからだ。ある党派に属する女子は、全員が類似のファッションをまとう傾向があるが、副官は、女王蜂と一番よく似た服装や仕草をしている。この

ために、このふたりは、他の女子からは侵入できないように見える。一緒になって、他の女子を苛めたり、黙らせたりする。このふたりが最初に男子に注目することが多いが、その男子はしばしば別人である。この両者の相違は、もし分離させたなら行動を改めるのが副官で、別の相棒の副官をみつけてきて、また同じことを始めるのが女王蜂である。

副官には、女王蜂という親友がいて、すること・考えること・衣装の選び方などを教えてくれる。副官の女子にとって、権威なのは親友であって、親ではない。自分たち以外は、みんなが女王蜂志願者だと思える。副官の親の目からは、親友(女王蜂)が、娘を連れ回っているように見える。副官は、女王蜂のためにあらゆることをする。

副官は、女王蜂がいなければ得られない権力を手にしている。女王蜂という親友を得ており、その親友のために人気が出ている状態である。

副官には、自分の意見が言えない。あまり長く女王蜂につきまといすぎると、自分には自分自身の意見があったことも忘れてしまう。

(3) 情報屋：情報屋は、ガールワールドの通貨である情報を溜め込んでいる。戦略的にその情報を隠したり話したりすることで、混乱を巻き起こす。女子の誰かへの悪口を、一定の機会に暴露して、事情通だという自分の評判を高める。ゴシップを言っているようにではなく、「あなたの友人として言っている」という、無垢な口調で話すことで自分をうまく信頼させる。

情報屋は、女王蜂と同じほど力が強いが、一見して伝令のようにも見える。大人の前では黙っていて、引っ込み思案であることが多い。友人よりも子供っぽくみえることが多い。とても可愛らしく無害そうなので、大人のレーダーをくぐり抜ける。

情報屋は、とても秘密主義である。複雑な、戦略的な考え方をする。誰とも仲がいいようにみえ、時には誰かのペットであるかにすらみえる。戦いの話題になることは滅多にない。集団から排斥されることもほとんどない。

情報屋が得るものは、権力と安全性である。情報屋は、他の女子にはとても不可解にみえる。なぜなら、無害にみえるのに、誰もが彼女を怖れているからだ。

ひとたび他の女子たちが、情報屋が何をしているかに気づけば、もはや信頼されなくなる。情報屋は、功利主義的な精神傾向なので、他の女子が自分にとって信頼できる資源になりうることをすら忘れることもある。

(4) 浮遊者：浮遊者は、特定の党派に属さないことでそれとわかる。複数の党派に友人がいて、それらを渡り歩く。浮遊者には、自分を守る特徴がある。美人であっても、美人すぎない(女王蜂や副官ではない、目立ちすぎない)。好意的で、洗練されすぎでもおらず、対立はさける。自尊心を党派所属には依拠させていないので、自尊心も高い傾向がある。他の女子への影響力はあるが、相手を不愉快にはさせない。女子はみな浮遊者になりたがる。なぜなら浮遊者は、自尊心があり、誰からも本心から好かれるし、誰にも親切だからだ。意地悪によって支配しないので、他の女子からも敬意を払われる。追い詰められた時に、女王蜂に楯突くことができる少数の実例が浮遊者であるが、女王蜂ほどの権力はない。女王蜂がそうするような、不安と不満のタネを他の女子にまくことで何かを得ることがないからである。

浮遊者は誰かを排斥しようとしめない。友人達は浮遊者のまわりで快適にしている。浮遊者はいつでも会話の中心になろうとはしない。グループ外の人を自分でグループに連れてきて、しかもそれ

に成功することもある。

浮遊者の仲間は、彼女を人間として好いている。浮遊者は、社会的地位を維持するためだけに何かを義性にすることは少ない。

浮遊者が失うものは何もないので、自分の娘がそうだったらよろこぶべきだ。ただし、自分の娘がそうだと誤解している親はとて多いことに留意すべきである。

(5) 混乱した傍観者：混乱した傍観者は、いつでも、「正しいこと」と「党派がやらせること」のあいだで混乱している。結果として、このタイプが一番、党派同士の対立にまきこまれやすい。女王蜂と副官のために弁解をするが、それが間違っていることも知っている。男子と一緒にいる方が不快ではないが、党派にも影響されやすい(党派が決めたふさわしい男子と一緒にいる、というように)。グループから得られる地位がとても大事である。もっと強い女子に対抗するという考えは、恐ろしいと感じられる。女王蜂のさせることが好きではないが、それをやめるだけの力がない。

誰にも対応しようとし、嫌だということができない。混乱した傍観者は、もっと強力な女子と結びつくことで、地位と人気と男子とを得る。

このタイプはとて多くを犠牲にしている。友人にからかわれるので新しいことが始められず、好きなことができない。実際よりもできないかのように自分を提示する。

(6) ご機嫌取り、女王蜂志願者、伝令：女子は、ほぼ全員が、ご機嫌取りか、女王蜂志願者である。女王蜂のいうことは何でも支持し、衣服なども真似することで、グループでの地位を高める。グループ内で、自分より上の女子のご機嫌取りを、何よりもしたがる。相手次第で行動を変えるので、対立に巻き込まれやすい。標的について

のゴシップを広めるなどの「汚れ仕事」もする。情報屋が情報を溜め込むのにたいして、このタイプはうわさを広める。しかし、同調し過ぎだと見えると、簡単に落とされる(ガールワールドでは、「やり過ぎ」が一番悪い。すべては「努力なし」であるかにみえるべきである)。女王蜂と副官は召使いを便利に使うが、陰口もいう。「あの子、すぐくおべっか使うんだよ。最低」など。党派の争いで、伝令役になると、このタイプの地位は、とつぜん上昇する。ただし伝令以上の地位にはなれない。それで、たえず対立を起こさせては、自分の役割を維持しようとする。

このタイプにとっては、自分自身よりも他の女子の意見の方が重要である。彼女がもつ「何がいま流行っているか」の意見はころころ変わる。自分の欲しいものとグループのそれとが区別できない。「正しい」服装などをしようと必死である。他の女子に助けられたり助言されたり、彼らのために「汚れ仕事」をしているときのほうが快適である。ゴシップが大好きで、電話とメールなしには生きられない。

このタイプが得ているものは「所属しているという感覚」である。行動の途中段階に介在して、他の女子への権力を発揮する。

このタイプが失うものは、個人としての正統性である。自分は誰か、どんな価値があるかが、まだ分からない。他者から何を求められるかをいつでも考えて、かわりに何が得られるかは考えない。友情について不安である。個人としての境界が発達しておらず、それを他者にも伝えられない。

(7) 標的：標的は、犠牲者である。他の女子がそのように設定したので、馬鹿にされ、排除される。標的は党派に属しないとされ、クラスの「負け犬」といわれる。その通りのこともあるが、違

うことも多い。なぜなら、党派にいただけでは、他のメンバーから攻撃されない保証にはならないからだ。党派の外部の女子は、その党派にとっての適切なものごとを採用していないがために標的とされる。党派の中の女子も、女王蜂に桶突いたりすれば、標的にされる。

標的は、他の女子の行為が止められないと感じる。仲間がおらず、誰も同意してくれない、孤立していると感じる。自分は誰も好きじゃないと言って他人を拒絶することによって、苦痛を覆い隠す。自分からそうしていると当人が誤解していることもあるために、標的の特定化は難しい。

標的であることには利益もある。自分が標的であれば、いじめを受けていたり差別されている人への共感を生じやすい。標的だと、客観的にもなれる。本当に自分の好きなことが、党派と無関係にできるかもしれない。「自分は負け犬の党派にいたけれど、それでも自分の友人は本物の友人だ」と言ってきた女子がいる。多くの女子には、このような安心感は得られない。

標的であれば、他の女子の残酷さの前に無力である。自分自身であるがゆえに、党派から恥をかかされる。それに適応するために、変わることを余儀なくされる。無力に感じ、結果をコントロールできない。学業に集中できないほど混乱する。親にそう告げるかわりに、ひきこもる。

しばしば、ひとつの学年には、ふたりの女王蜂がいて、権力を奪い合っている。以上の役割は、しばしば変更になる。優位にある党派だけでなく、どんな党派にもこのような分業がある（以上、Wiseman, 2002 から部分的に要約して引用）。

以上が、やや典型的な印象もあるが、ワイズマンの実用的な女子クリーク内部の役割の分類である。各役割の固定性や普遍性、再起性などについて議論の余地は多々あるだろうが、この分類の長

所は、多くの人が「そうそう、あるある」と首肯できるような、典型的ないじめっ子といじめられっ子の役割と性格とを、うまく抽出してみせたことにあるだろう。ちなみに、本書をベースとして、ハリウッド映画「ミーン・ガールズ」(2004)が制作され、一定の好評を博したといわれる。同映画の成功を受けて、同題のゲームや映画続編も製作されている。また、ワイズマン自身も、自著の続編として、今度は子供の親に焦点を合わせた「女王蜂ママと王様パパ *Queen Bee Moms and Kingpin Dads*」(2006)を刊行、これをベースとした映画化「ミーン・ママズ *Mean Moms*」も制作が進行中と伝えられる（成人における関係攻撃については、森下(2012, 印刷中)を参照のこと）。アメリカのメディアは、このところ、女子攻撃性ものが、いわばブームになっており、ネット書店でいくつかの関連キーワードの検索を行えば、大量の類書がヒットする状態になっている。

3) 呼称をめぐる不統一の問題

ここまで概略的に述べたような領域をどのように呼ぶか、という基本的な呼称の問題が指摘されている。この章の最後に、簡単にそれについて触れておく。

本論を通して、筆者は、この研究領域のことを、複数の和訳名称で呼び続けている。というのも、まだこの領域については確定した単一の名称が存在せず、研究者グループに応じて、それぞれが適切と考える別個の名称が使用されているからである。

この領域についての、児童・発達心理学からのアプローチを中心にまとめられた Putallaz and Bierman (2004)では、多くの場合に、関係攻撃(性)という表現が使用されている（ただし論者によって類似の別の形容も併用されている）。

Underwood (2003)では、社会的攻撃(性)が主として用いられている。そして、この呼称の問題について、アンダーウッドは1章を費やして検討している。そこでの検討を要約して示しておく(Underwood, 2003, Chapt. 2 から要約して引用)。

アンダーウッドはまず、攻撃性のサブタイプを設定した研究者は多いということを指摘して、反社会的／親社会的、身体的／言語的、間接的／直接的、標的のいる／標的のいない、道具的／憎悪的、攻撃的／防御的、表出的、反作用的／先行的、制度的、理性的／操作的、物理的／社会的、顕示的／関係的、物理的／非物理的、といった対立的な攻撃性のサブタイプが、これまでに設定されてきたことを示している。

このような攻撃性のサブタイプが設定されたことには、いくつかの原因があるとして、(1) 攻撃性の原因となる異なった要因を示すために、(2) 各種の調査からの知見の不一致を解消するために、(3) 物理的なものに限定した攻撃性の定義では、女性にいつそう特徴的な有害行動を扱っていないから、という3点を論じている。この第3の問題から、間接的かつ社会的かつ関係的な、女子の攻撃行動を記述するためのサブタイプが提起されたのだとする。

このようにしてアンダーウッドは、このタイプの攻撃行動を定義する代表的な概念として、間接的 indirect, 社会的 social, 関係的 relational, という3つのオーバーラップした表現があるとする。そして、それぞれについて簡単な検討を加えている。まず、間接的攻撃性は、1961年に、バス A. H. Buss が用いたとされている。物理的なケンカよりも微妙な有害行動で、女子は物理的なケンカよりもこちらを多く使うとされているという。ついで、社会的攻撃性は、ケアンズと協力者たち Cairns and colleagues が1989年に使用した

とされる。彼らはノースカロライナで長期間の調査を実施し、毎年、4から10学年の子供たちに、仲間うちでの紛争について質問している。その結果、女子が物理的な攻撃を含む紛争について言及したことはほとんどなかったが、4から7学年では、社会的な操作を含むケンカの数が増加していた。7学年までに、女子と他の女子との紛争の1/3以上で、友情の操作が含まれていた。ケアンズらは、このような行動を記述するために、社会的攻撃性という用語を提起している。最後に、関係的攻撃性は、クリックとグロトペター Crick and Grotpeter が1995年に用いたとされる。彼らにとっての関係的攻撃性の定義は、「友人関係の意図的な操作と傷つけを通じて他者を害すること」である。彼らは、ピア・ノミネート法を用いて、特定タイプの行動をしやすい友人を指名させている。「誰かに立腹したら、仕返しとして友達仲間に入れない」「言うことをきかないと、もう嫌いになる」などの攻撃行動をする友人をノミネートさせる方法である。また、彼らは、関係的攻撃性が、物理的攻撃性と同じように、心理的不適応と、その後のさらに良くない結果にも関連していることを、はじめて明示的に論じている。アンダーウッドは、この興味深いアイデアから、重要な多くの調査が生まだされた、とする。

このように、多くの攻撃性のサブタイプの中から、間接的、社会的、関係的という3つを取り出した後に、これらを説明し比較検討して、アンダーウッド当人は、社会的攻撃性、という表現を採用している。独立に実施されたこれらの研究が、それぞれ類似した概念を提起しているわけだが、それらは、まだ十分に明瞭にこのような現象を特定化しているわけではなく、お互いの概念が重なっている部分もある。アンダーウッドらが社会的攻撃性という用語を用いているのは、何より

もそれが、「社会的に害をなす、という行動の働き」をもっともよく示しているからだ、という。また、クリックらの関係の攻撃性の概念では、非言語的行動は除外されているが、これを含める可能性を残したい意図もあると述べている。身振りで痛めつけることも、排除することもできるからだ。また、間接的攻撃性という用語が問題なのは、ある種の行動はしごく直接的（たとえば「言うことを聞かないなら、もう友達じゃなくなるよ」と言う行動などは）だからだ、という。

以上のアンダーウッドの先行研究レビューは詳細なものだが、確定的な結論を出すものではない。何よりも、現在進行中の研究が多いため、概念上の整理が行いきれない状態といえる。研究ジャンルとしては活況を呈しているのだろうが、確定的な議論が整うまでには至っていないようだ。おそらくこの一因は、「物理的・直接的ではない攻撃性」という対象の規定にある。というのもそれは、必ずしも誰にも一意的に自明な現象ではないからだ。実際、例えば一見してこの問題と無関係な、マスコミ研究の領域などですら、これに類する議論は、すでに80年代から行われてきた。マスコミの内容分析 content analysis を実施する際に、しばしば問題とされるのが、そのマスコミ内容における反社会的な「暴力」および「性」の描写である。「暴力」描写は反社会性がより明瞭なので、規制が実施されやすい。しかし、何をもってあるマスコミ内容の「暴力」描写とするのかといえば、通常それは、物理的な「殴る・蹴る」などの描写の存在をもって、形式的に「暴力」描写と判定している。したがって、テレビドラマなどにくら「言葉いじめ」などが多く含まれていても、それらは「暴力」とはまるでカウントされない反面、子供向けの誇張された描写を含む動物アニメーションなどが、大量の「暴力」描

写を含むものと分類されてしまうという問題が、長く指摘されてきた。

以上のように、よく整理された文献レビューですら、必ずしも明瞭に1つの用語を推奨しているわけではない現状がある。筆者自身のこれまでの研究経緯を振り返っても、当初は女子の攻撃性と呼び、ついで関係攻撃性と呼び、その後は潜在的攻撃性となり、現状では社会的攻撃性という用語を使うようになっていく。その時々論者の用語に影響されてきたことが分かる。とはいえ、まだ単一の概念として成立してはいないものごとであるから、このような用語の変化もある程度は仕方がないものと考えている。

本論では、以下に述べるような、この現象の「社会的」な側面を重視するという意味合いから、社会的攻撃性という表現を、筆者自身としては採用している。ただし、各論者の用語法が不統一なままなので、それらを参照する場合には、各論者の用語法をそのまま採用する。したがって、本論中を通して、結果的に、類似の現象についての異なる呼称が頻出するが、以上の理由によるものと理解されたい。

3. シンボリック相互作用論的アプローチの有効性

以上、概略を紹介したように、社会的攻撃性の存在および研究は、いわば、研究者サイドの問題構成における「ねじの回転」によって発見されたものといえる。「いじめ」や「間接的な攻撃行動」の存在とその調査は、決して珍しいものではなく、長く指摘され、研究されてきたものだからである。とはいえ、このようなお馴染みの「いじめ」や「言葉などによる間接的な攻撃」という多岐にわたる現象を、「女子の攻撃行動」「ガールワールドで一般的なもの」「関係攻撃」「社会的攻

撃」などの概念によって新しく把握し直すことで、すでにあいまいな形でその存在が認識されていた攻撃性の1形式が、新しい研究テーマとして再構成され、関連する事象ともども、注目を受けるようになったものといえる。その意味では、社会的攻撃性の発見は、典型的に21世紀的な出来事といえよう。それまでずっと存在していたが、それほど注目されなかった事象が、新しいラベルが貼られることによって、大きくクローズアップされるようになったわけである。

すでに検討してきたように、社会的攻撃性に関する研究は、これまでのところ、主として心理学的なアプローチによる、個人に焦点を合わせた学術研究と、いっそうマクロな役割や役割分業なども視野に入れた、集団論的な視点をもつが、論述のスタンスとしては基本的に一般向けの啓蒙書・実用書という方向を向いた一般的著作、という2つの系統をもっているようにみえる。代表的な研究レビュー書であるPutallaz and Bierman (2004) や Underwood (2003) では、一般向けの著作を無視してはいないが、それほど主題的に取り上げているわけではない。同様に、一般向けの著作において、先行する学術研究が引き合いに出されることはあるが、それらにそのまま従って、論述が進められているわけではない。新しい研究領域が発生した場合、これはよく起きることであるが、両者はほどほどの距離を保って共存している状態であろう。

この領域について、筆者のような社会学寄りの社会心理学がアプローチをする場合、どういった方向性が適切だろうか？ 本研究は、比較的短期の探索的な調査として位置づけられている。そのような、投入可能な資源に一定程度の制約がある状況で、どのような調査方法を設定すれば、より生産的な知見が得られるだろうか？

筆者の判断では、筆者が研究している社会心理学の1学派であるシンボリック相互作用論的な社会集団論の視点からのアプローチが、今回の目的では有効であろうと考えられた。第一に、既存の学術的な研究方法では、非常に具体的な関係攻撃行動の実例や、そこでの個々の関係者に焦点が合わされる結果として、集団論的な側面は、まだそれほど詳細に検討されていない。長期的な関係攻撃の集団論的な実態なども、学術的に十分に調査されているわけではないようだ。となれば、このような側面に焦点を合わせた社会的攻撃性の調査にも、一定の意味があることになる。第二に、調査の手法として、今回の研究では、基本的にインタビュー法ないし質問紙アンケート法を採用することになる。これらは、比較的短期間に実施可能な、筆者がしばしば実施している手法だからである。となると、ミクロな対人場面を記録して関係攻撃の実態を測定する、心理学的なアプローチに類似した精査的な手法は採用することができない。そして、一般的なインタビューや質問紙アンケートにおいては、それほど詳細なミクロ事象を、確実にかつ大量に蒐集することは容易ではない。このような調査手法の特性からも、社会集団に焦点を合わせた社会的攻撃性の研究を行うことは、妥当な選択だと考えられた。第三に、ワイズマンの著作にとりわけ明瞭にみとめられ、その他の研究においても指摘としては色々と語られているような、いじめっ子集団における役割や役割分業の問題は、まだそれほど充分には検証されていないようにみえる。そのような側面に焦点を合わせた、探索的で仮説構成的な質問紙調査を実施することには、一定の意味があると考えられた。

以上の理由から、本研究では、シンボリック相互作用論的な集団論に依拠した、質問紙アンケートに基づく、社会的攻撃性についての社会調査を

実施することになった。

4. 社会的攻撃性の予備調査：作業と結果の概要

2010年度の大学院ゼミにて、この領域の代表的な研究例を検討した。文献検討の作業は、2011年度も継続して実施したが、この過程で、ゼミ参加者から、調査に興味があるといった感想が聞かれるようになった。調査実施への希望が聞かれるようになることは、ゼミの運営としてはうまくいっていることの傍証である。さっそく、文献購読中心のゼミを、調査準備のゼミに切り替え、ゼミ参加者で構成された調査チームを結成した。この時点で、2011年の6月だった。同7月中を使って調査方法を確定し、簡単なプリテストを実施して質問紙を改訂し、調査期間と調査対象の範囲を確定した後、同8月1日から10月7日まで約9週間を調査実施期間として、実査を行った(当初、9月末日までの予定が、都合で1週間延長された)。

以上のように、この調査自体は、ある程度の準備をして実施されたものであり、その意味では決して予備調査的なものではない。ただし、このテーマについて、質問紙アンケートがどれほど有効であるかが不明だった。その意味では、試験的な実施としての意味合いを持っている。また、そもそも日本において、社会的攻撃性がどのように生じているのか、生じているとしてどれだけ回答が得られるのか、などといった疑問は、いっさい不明なままでの実施であったため、研究の初期段階がいつでもそうであるように、一定の事実発見的で仮説構成的な予備調査としての性質を持っていることも否定できない。本研究は、シンボリック相互作用論的には、研究領域の概要を把握し調査上の仮説を構成するための、探査的な調査とし

て意図されている。また、結果として得られた有効回答数が100サンプル程度と、決して多くはないことも配慮せねばならない。調査チームとしては、多くが手探り状態のまま、できるだけ生産的な結果が得られるように努力したことは事実である。

1) 調査の方法と実施経過

少人数の調査チームが実施する社会調査であるため、少しでもマンパワーを有効に活かすべく、調査手法について事前に検討した。結果的に、本論末に資料1として掲載したような形式の、インターネットのウェブページを用いたウェブ調査の手法を利用することにした。さらに、インターネット環境に不慣れな回答者にも対応してもらうべく、同一の質問票の、ペーパー版(資料2、単純集計結果付)をも用意して、随時、調査チームメンバーの判断で併用することにした。

前出のシモンズのEメール調査では、著者の知人をコンタクト・ポイントとして、スノーボール式に回答者がどんどん増えたように書かれている。もし社会的攻撃性に関する話題が、現代の日本社会でもそれほどひんぱんに語られるものではなく、多くの関係者が「それについて誰かに伝えたい」という意識を抱えているのなら、類似のインターネット経由での調査を実施することで、大量の回答が寄せられると期待された。シモンズの調査は、おそらく2000年前後にアメリカにて実施されている。

ウェブ調査の具体的な方法であるが、資料2に添付した内容の質問を、ウェブページ形式で作成して、筆者の利用しているレンタルサーバー上に、アップロードしておいた(ウェブページ作成は、Macintosh上で、作成ソフトRapidWeaverを使用して行った)。調査はおよそ30問からなる

が、回答者が経験した社会的攻撃について、ある程度詳細な説明を自由回答で求めた1質問(Q13)以外は、すべてウェブページのプルダウンメニューから、選択肢を選択するだけで回答できる形式とした。選択肢を選択し終えたのち、ページ末尾の「送信」ボタンをクリックすることで、回答内容が自動的に、筆者の利用するメールサーバーへ送信されるようにウェブページを設計した(送信された回答メールは、ほぼ同時に、各調査メンバーのメールアドレスへも転送されるように設定し、回答状況を共有した)。近年、わが国の国勢調査などでも、このようなウェブページ・アンケート方式が併用されており、この方式じたいには、それほど問題がないものと想定した。安全のために、このウェブページには、アクセスを限定する簡単なユーザーIDとパスワードを設定した。

当初は、調査者である調査チームの大学院生が、IDとパスワードを記入した紙片などに関心のある調査対象者に大量に配布し、事後的にアクセスし回答してもらうという形式での調査を想定した。これが典型的なウェブ版のアンケート調査であろう。しかし、結果的に、このような事後的な回答を依頼する方式では、ほとんど回答してくれる人がいなかった。多くの人は、調査者からの説明に対して、「それは面白いね」などと協力的な態度や感想は示すものの、現実にその後ウェブページにアクセスして回答してくれるまで協力してくれた人は少数だった。自宅で定期的にPCに向かうという習慣は、今回の調査対象者には、あまり浸透していなかった可能性がある。

このため、調査方式を少しだけ変更し、調査者が、実際にPCや携帯電話などの上で当該のウェブページを提示し、その場で調査者が指示しながら、調査対象者に回答してもらう形式に切り替え

た。この方式だと、興味を示した多くの対象者が、その場で回答について助言されながら回答できたために、回答者数を増加させることができた。この結果として、2つの変化が調査上生じた。第一に、回答者数が期待されたほど大きくならなかった。当初、依頼を大量に配布すれば、相当数の回答メールが寄せられるという期待があったが、現実には、100通ほどの回答数にとどまった。ただし、第二に、それらの回答の多くは、調査者が立ち会いのもと、適宜助言をしつつ選択された回答であるため、回答としての品質は、ある程度一定して信頼できるものになった。この調査は、当初は、不特定多数の回答者を想定した自記式留置型に類するウェブ・アンケートとして企画されたわけだが、結果的に、ウェブページをアンケート用紙代わりに利用した、面接式の社会調査に近い性質をもつものになったわけである。このため、回答数は多くないが、信頼性の高い回答が得られている可能性が高い。一定数の回答については、アンケート内容に尽きない細部情報が得られた。

なお、日頃PCに馴染みがないなどの理由で、ウェブページ・アンケートに回答できない者には、ペーパー版のアンケートに回答してもらった。また海外に在住であるために、調査者が傍らで確認しつつ回答できない者は、本来の計画のように、回答だけをメールで送ってもらうこととなった(この部分がもっとも回答者の匿名性が高いものに結果としてなった)。

調査対象サンプルの実態であるが、調査者からの依頼によって、結果的に選定されることになった。したがって、確実にランダムなサンプルというわけではない。調査者である大学院生の属性は、20代の女性1、20代の男性1、40代の社会人女性1、30代の中国人留学生女性1、という構

成だった。これらの調査者が、自分の周囲の知人などに声をかけて、協力してくれる人を発見し、結果的に回答者を選定することになった。したがって、調査者の社会関係や就労状況などを大きく反映した調査依頼が行われることになった。国内では、ウェブ経由で遠方から送付された回答はなかったため、ほとんどが調査者の在住する首都圏での調査となった。

なお、中国人留学生には、日中での社会的攻撃性の比較を行う目的で、北京市を中心にした中国在住の中国人に対して、ウェブ調査への回答を依頼してもらった。この中国人調査の部分では、資料2にある質問を、そのまま資料1と同じ形式で、調査者が中国語に翻訳した中国語版ウェブページを、別途、筆者のウェブサーバー上に用意して、それに回答してもらう、という方式で調査が行われた。この部分は、ウェブページ質問への中国からのEメール回答が、日本国内で管理された（その本体がどこにあるかは不明だが）メールサーバーへ送信される、という形でのメール調査になった。

なお、回答が、携帯電話に搭載されたウェブブラウザから送信された場合、選択肢の部分の文字が文字化けしてしまう、という不都合が生じた（携帯電話とサーバーとで、使用する文字コード体系が不一致だったものと推測される）。ただしこれは、半角文字である「選択肢番号」には影響しなかったため、ほぼすべての回答について選択肢番号は特定可能であり、大きな影響は出なかった。ただ、自由回答部分の文字化けが修復できなかったため、携帯電話経由で送信された回答メール数通については、自由回答を分析に利用できなかった。

ウェブ経由での社会調査については、各種の可能性と問題点がすでに指摘されている（たとえば

Constable, 2003の第2章「想像上のバーチャル共同体におけるエスノグラフィー」およびそれへの註を参照）。ただし、今回の調査方式については、中国調査の部分以外は、実質的に面接式の質問紙調査とほとんど変わらないものになったので、匿名性の高いSNSや掲示板など経由でのウェブ調査とは性質が異なるものといえるだろう。

2) 質問の意図と構成

限られたスペースと質問数で、できるだけ目的に適合的な社会調査が実施できるように、質問紙の作成には一定の時間をかけ、調査チーム全員の合議と同意を前提に検討を続けた。この調査では、既述の問題関心から、特定のいじめ事件を調査の基本単位として、何よりも「その社会的攻撃性が発揮された具体的な事例における、集団の大きさ、集団内での役割と属性、そして具体的な攻撃の手法」を問題とした。

具体的には、当該事件について、発生の時代（何年代の事件か）、持続性（どれだけ続いたか）、発生の場所（学校、寮など）を確認した。

続いて、「当該の事件では、1人の被害者に対して、1人以上の単独または集団での社会的攻撃行動が起きていた」ともと仮定し、さらに、それを（当事者であることもある）報告者（回答者）が見聞きしていた、と仮定した。この想定に基づいて、被害者の年齢、性別、社会的特性（しばしばこの関連で問題視される、いじめっ子・いじめられっ子は、人気者か目立たない人かを特定）、回答者との関係、について質問した。同じ属性に関する質問を、社会的攻撃行動の首謀者についても尋ねた。いじめっ子集団のサイズを質問した。女子集団、男子集団で、サイズに違いがありうる。

ワイズマンらが記述している社会的攻撃における役割分業を念頭に、3つの代表的な役割の人が、その集団内にいたか、その事件にも関与していたか、を質問した。ここでの代表的な役割とは、「副官」、「情報屋」、「使い走り」である。これらの役割の人についても、性別と年齢は確認した。

社会的攻撃性の発露としてのいじめ手段には色々なものがありうる。ここでは、間接的な情報操作や人間関係の操作に依拠した手法の代表的なものを7種類特定化し、これに、より直接的・物理攻撃的な3種類の攻撃行動を合わせた、合計10種類の攻撃行動のタイプを設定した。そして、その事件でよく使われていた手口を、これら10種類のうちから3つまで選択してもらった。これらのタイプは必ずしも相互に排他的ではないし、これだけで社会的攻撃性のタイプを尽くしているわけでもない。ただし、初見の回答者にとって無理なく選択できるような類型化と表現を意図した。

表1 本調査で用いた攻撃性のタイプ

-
1. 標的がない時に、かげ口を言う
 2. 標的の悪いウワサを流す
 3. 標的がいても、黙殺や無視する
 4. 標的を仲間に入れない
 5. 標的をみんなの行事などにさそわない
 6. 悪口をブログやノートに書く
 7. 標的が不快になるほど計画的にからかう
 8. 肉体的な暴力を与える
 9. あからさまな脅しをする
 10. 金品をとる、こわす
-

社会的攻撃性に依拠したいじめ行動では、しばしば、ある時点でのいじめっ子が、次にはいじめられっ子になる、という役割逆転が生じるといわれる。この事実を確認するため、そのような逆転が発生したかどうかを質問した。

そのいじめ事件について、上のような形式では

説明できない具体的な細部について、匿名化した自由回答での記述を求めた。回答率はそれほど高くなかったが、とりわけ回答者や関係者が成人である場合、個別のケースとして検討しなくなるほど充実した説明を記入してくれた回答者もいた。

このような事件は、目撃者＝回答者が幼少だった場合、あいまいに記憶されたり、誇張して記憶されていたりする可能性がある。ここを検討可能とすべく、事件が起きた時点での回答者の年齢を確認した。

以上が、本調査における各質問の基本的な意図とその構成である。

3) 調査結果の概要

執筆テーマに即した詳細な調査結果の分析と考察は、各テーマを分担している大学院生による個別論文においてなされるはずである。したがってここでは、むしろ調査結果の概要を、素集計結果を中心として紹介しておきたい。

本研究は、特にその意図があったわけではないが、結果的に、日中2ヶ国において実施されることになった。回答者総数は103、うち日本での回答者数が76、中国での回答者数が27となっている。1/4程度の中国人サンプルを含んだ調査結果といえる。

回答された事例のうちでは、全体として90年代以後のものが圧倒的に多かった。とりわけ日本サンプルでは、2000年代が6割を占めている。中国サンプルではこれが4割で、2010年代が37%だった。仕方のないことかもしれないが、過去におきた社会的攻撃の実例は、あまり報告されておらず、長期の経年的比較が困難だった。

発生当時の回答者（目撃者）の年齢は、先にも述べた調査者の属性を反映してか、10代と20～30代が多かった。ただし、一定数の中高年サンプル

も得られた。

事件の首謀者については、回答者の直接の知人友人が多く、その意味では、比較的身近な事件が多く報告されていることになり、伝聞のみに依拠したものよりも、誇張や歪曲の可能性は、一応、より低いことになる。首謀者年齢は、調査者を反映して、日本サンプルでは10代前半が約半数をしめた。中国サンプルでは20代が約半数をしめた。首謀者の性別は、全体として、ほぼ男女が半々だった。社会的攻撃性が、女性だけに尽きないことを示すものといえる。

首謀者の基本的な性質であるが、日中で大きな差がみられ、日本では「人気者」が65%と圧倒的に多く、ついで「特に目立たない人」「うまく適応できていない感じの人」がそれぞれ16%、13%程度だった。中国サンプルでは、人気者11%、目立たない人22%、適応できていない人30%となり、不適応者が首謀者であることが多い。また、中国サンプルでは、37%は「よく知らない人」とされており、この回答が多い。詳しく知らない他人による事件であることが推測される。

被害者（標的）については、回答者の直接の友人知人が、日中いずれの場合もおよそ半数をしめており、これは首謀者と同様の傾向である。ただし、被害者が回答者自身であるという回答が、日本で26%、中国で15%程度となり、ある程度多くなっている。被害者年齢は、日本では10代前半が50%、30代が20%程度となっているのに対して、中国では20代が6割ほどを占めていた。被害者の性別は、基本的に女性が多く、社会的攻撃においては、加害者には男性も多いものの、被害者は女性が多かった。日本では、男性：女性が、3：7であり、中国ではほぼ同数である。

被害者の基本的な性質であるが、日本では、人

気者：目立たない人：不適応者の比率が、4：3：2となった。中国では、3：3：2.5となっている。傾向としては似ており、人気者は標的にもなりやすい。しかし、目立たない人や不適応者も、2～3割が標的にされている。

事件の発生を知った手段であるが、日本では、回答者が直接に知ったものが5割をこえているのに対して、中国では事件の関係者からの伝聞（間接的な伝聞）が4割だった。ただし、日本では3割弱、中国では2割弱は、回答者本人が、被害者または加害者である。

事件の発生場所であるが、日本では、「学校内や学校同士」がほぼ7割、ついで「学校や職場の寮や社宅など」が2割、これらが大半である。今回の調査では、幼児から高齢者まですべてを対象とした調査票を設計したため、可能性のある誰でもが回答できるような選択肢の選定に苦心した。結果として、大多数の回答は、10代の子供、20～30代の青年についてのものとなったため、発生場所についても、頷ける結果が示されている。中国サンプルでは、「学校」37%、「寮や社宅」30%、「家庭内」および「町内」各10%となり、日本サンプルに比較して、いっそう第一次的集団に近い場所での事件が多く報告されているのが分かる。

事件の持続期間については、全体的には、「数ヶ月」3割、「1～3年」3割となっているが、日本では「1～3年」が4割、「3年間以上」も1割近くと、長期的である傾向がみられる。対して中国では、「1日から数日」4割と、いっそう短期的である。ただしこれは、具体的にどのような社会的攻撃が想定されていたか（1事件として、どの規模のものを念頭において回答したか）によって意味が異なる結果ともいえる。

事件でよく使われていた手口については、順不

同で3つまで、同じ選択肢群から選択するという複数回答方式にて得られた回答である。よく使われていた手口3種を合計した結果でみると、全体で、「かげ口」56%、「無視・黙殺」48%、「悪いウワサを流す」と「仲間外し」が41%、「みんなの行事に誘わない」35%、「計画的なからかい」26%、となっている。同じ悪口であっても、証拠が残りの「ブログやノートに悪口を書く」は7.7%と少ない。直接的、物理的な攻撃としての「肉体的暴力」12.7%、「あからさまな脅し」15.5%、「金品をとる、こわす」9.7%と、社会的攻撃行動ではない手法もある程度あげられていた。全体として、証拠が残りにくく、意図の有無が特定されにくく、攻撃の効果が主観的にしか察知されないタイプの攻撃行動が愛好されているのは、社会的攻撃行動としては当然の結果といえるだろう。なお、「仲間外し」は、日本では5割が行っていると回答したが、中国では1割程度であり、国情による相違がはっきりしている。

これら手口の共起パターンであるが、それほど特定の組み合わせに集中しているわけではなかった。出現頻度3回以上でみると、「かげ口」+「悪いウワサ」+「無視黙殺」という関係攻撃的な性質の高い組み合わせが6ケース、「かげ口」+「悪いウワサ」+「仲間外し」が4ケース、「かげ口」+「無視黙殺」+「仲間外し」が4ケース、「かげ口」+「悪いウワサ」+「行事外し」が3ケース、これ以外は若干の組み合わせで2ケース存在し、残りは各1ケースだけだった。

物理的攻撃行動3種についてもある程度の回答があったが、ケース数は多くない。20人程度がいずれかを挙げている。社会的攻撃行動と共起している場合が多かった。また、これら「肉体的な暴力」「あからさまな脅し」「金品をとる、こわす」について、これら3行動のすべてまたは2者

が共起する場合も多少ながらみられた。「肉体的な暴力」+「脅し」が4ケース、「脅し」+「金品をとる、こわす」が3ケース、「肉体的な暴力」+「金品」が2ケースである。

首謀者グループのサイズについては、全体として「単独」2割、「2~3名」4割、「4~5名」2割強、「6~9名」8%、「10名以上」7%、といった傾向であり、2,3人での犯行がもっとも多くみられた。ただし日中差が大きく、日本では単独犯が13%であるのに対して、中国では4割である。日本では、犯人グループがより大きくなる傾向がある。日本では「集団いじめ」に類する事件が多く報告されていた可能性がある。

首謀者グループにおける「副官」の存在については、日本で7割、中国で6割ほどの存在が報告された。副官がいなかったとはっきり回答したものは中国に多く、約18%だった。中国では単独犯の事件が多かったのが当然ではある。副官の多くは女性だった。

首謀者グループにおける「情報屋」の存在については、日本で4割、中国で3割の存在が報告された。日中いずれも、22%程度が、はっきりと「いなかった」と回答している。副官の存在に比較して、情報屋の存在はいっそう報告されることが少なかった。現実には情報屋が少数なのかどうかは分からない。情報屋は定義からして探知されることが少ない存在なので、気づかれていない可能性もある。日本で3割以上、中国で45%が、情報屋の存在について「分からない」と回答している（不正規回答であるDK/NA（知らない、分からない、今回は無回答だった者）を加えると、この回答はさらに多くなる。情報屋の性別については、日本では、男性15%、女性29%程度であるのに比して、中国では、男女ともに約3割であり、性差がみられない。

表2 集団の大きさ×集団内部の3役割（実数を記載）

	単独犯	副のみ	情のみ	副+使	副+情	副情使	計(人)
1人	13	2	1	1	4	0	21
2-3人	9	11	0	3	6	12	41
4-5人	3	9	0	3	2	6	23
6-9人	1	6	1	0	0	1	8
計(人)	26	28	2	7	12	19	93

首謀者グループにおける「使い走り」の存在については、日本で32%、中国で22%程度の存在が報告されている。このカテゴリーは、基本的に、女王蜂グループにはほぼ必ずみられるものとされる。ただし中国では単独犯が多かったので、日本においていっそう多くみられるのは妥当な結果といえる。使い走りは、日本では、男性が16%、女性が26%ほどであり、中国では、男性が26%、女性が22%ほどだった。

続いて、首謀者グループの人数(Q9)に応じて、その内部に副官、情報屋、使い走りという3役割の人がいたかどうか(Q10-1, Q11-1, Q12-1)を集計した(表2)。結果をみると、やや回答に不正確さがあつたらしく、首謀者グループは「単独だけ」という回答でも、単独犯と集計されたケースは13にすぎず、プラス副官が2ケース、プラス情報屋が1ケース、プラス副官と使い走りが1ケース、プラス副官と情報屋が4ケース存在した。役割が兼任されていない限り、これらのグループは、2~3人で構成されていなければおかしいことになる。現実的には、当該の事件の場合と、そうではない場合とで「首謀者グループ」が別様に想定されていたと推定される。

首謀者グループが大きくなればそれだけ、内部での役割分担も行われるようになり、結果として多くの役割を含むようになるかと予想したが、そういう結果はでなかった。もっとも多く3役割を含んでいたのは、2~3人のグループである。

6~9人のグループでは、かえって含まれる役割は減っている。また、多かった役割の共起パターンは、順番に、首謀者プラス、副官のみ>単独犯>副官+情報屋+使い走り>副官+情報屋>副官+使い走り、となっており、プラス情報屋単独は2ケースにとどまった。もともと情報屋は、それと察知しがたいのが特徴の役割なので、少なめに報告されている可能性がある。全体として、2~3人の少人数のグループにおいて、それぞれが各種役割を兼任・分担している場合が比較的多くみられるようだ。現実の攻撃グループでもまみられる傾向だろう。

しばしば、社会的攻撃の首謀者や首謀者グループは、何かの出来事の結果として、次には反対に、社会的攻撃の標的とされることが観察されている。これを検証するために、このような事態が、当該の首謀者グループについて起きていたかを質問した。結果は、日中ほぼ同じ割合で、20数%が「あった」、やはり20数%が「なかった」である。ただし、DK/NAを含めた「分からない」という回答がどちらでも5割ほどあるので、確定的な検討はしにくいだろう。

さらに詳細な具体的なトピック別の集計と分析は、各調査者の個別論文において示されている。ここでは、素集計結果からの概括的な傾向について粗述した。

5. 結果の要約と今後の課題

全体として、社会的攻撃行動が、女性のみならず男性においてもしばしば取られていることが判明した。ただし、その標的となるのは女性である場合が多い。国によって相違があったが、比較的少人数の首謀者グループが関与していることが多く、単独犯もある程度、存在していた。今回のサンプルでは、中国よりも日本での社会的攻撃事件の方が、長期化する傾向がみられる。事件で使われる手口としては、「証拠の残りにくい口頭いじめ」類とその組み合わせがもっとも愛好されている。露骨な物理的攻撃が共起している場合もみられた。首謀者グループのサイズとしては、単独犯もいるが、2~3人のグループと、4~5人のグループがもっとも一般的だった。グループ内での役割分担については、首謀者以外に、「副官」「情報屋」「使い走り」の3役割が、いずれもある程度一般的に、グループ内部に見られることが判明した。2~3人の小規模グループで、これらの役割が多く存在していた。ただし、これらの役割の事件への具体的な関与実態まではあまり特定できていない。

男性における社会的攻撃行動の存在が示されたこと、単独犯のみならず、とりわけ日本において、小集団による集団的・組織的な社会的攻撃行動の実例が確認されたこと、概括的な把握ながら、これらの社会的攻撃行動において偏愛される攻撃の手法がある程度特定できたこと、集団構成員の間に一定の役割分業が存在している可能性が示されたこと、などは、小規模ながら社会的攻撃行動の社会的な側面を検討しようとした本調査の有意な知見であると考えられる。今後は、ここでは概括的にしか質問できなかった、このような集団的・組織的な社会的攻撃行動の、いっそう具体的な詳細に踏み込んだ調査が必要とされるだ

う。それは、ある程度まで大規模な調査設計を必要とするものであるため、今後の動向を踏まえながら検討すべき可能性であろう。本研究は、事実発見的な、シンボリック相互作用論的な探査的調査としては、一定の結論が得られたものと考えられる。

参考文献

- Brown, L. M., *Girlfighting: Betrayal and Rejection among Girls*, New York Univ. Press, 2005.
- Brown, L. M. and Gilligan, C., *Meeting at the Crossroads: Women's Psychology and Girls' Development*, Harvard Univ. Press, 1993.
- Constable, N., *Romance on a Global Stage: Pen Pals, Virtual Ethnography, and "Mail Order" Marriages*, University of California Press, 2003.
- Crick, N. R., *Boys Will Be Boys, But What About Girls?: Childhood Aggression and Gender*, (DVD, Bullying and Beyond keynote address at Violence Prevention Under the Midnight Sun Conference), Solution Tree Studio, 2009.
- Crick, N. R., Ostrov, J. M., Appleyard, K., Jansen, E. A. and Casas, J. F., Relational Aggression in Early Childhood, Aggression, Anti-social Behavior, and Violence among Girls: A Developmental Perspective, in Putallaz, M. and Bierman, K. L. (eds.), Guilford Press, 2004: 71-89.
- 早瀬美樹, 「ひとりではいられないわたしたち——思春期女子の友人関係と隠された攻撃性」, 成城大学文学部マスコミ学科 (後藤将之ゼミ) 卒業論文, 2003.
- 森下優子, 「成人における社会的攻撃性 (仮題)」, 『成城コミュニケーション学研究』, 2012 (印刷中).
- 大塚薫, 「女性における社会的攻撃性 (仮題)」, 『成城コミュニケーション学研究』, 2012 (印刷中).
- Putallaz, M. and Bierman, K. L., (eds.), *Aggression, Antisocial Behavior, and Violence among Girls: A*

- Developmental Perspective*, Guilford, 2004.
- 李敏, 「社会的攻撃性の日中国際比較 (仮題)」, 『成城コミュニケーション学研究』, 2012 (印刷中).
- Sacks, P., *Generation X Goes to College: An Eye-Opening Account of Teaching in Postmodern America*, Open Court, 1996.
- 柴又彬, 「男性における社会的攻撃性 (仮題)」, 『成城コミュニケーション学研究』, 2012, (印刷中).
- Simmons, R., *Odd Girl Out: The Hidden Culture of Aggression in Girls*, Harcourt, 2002, Revised ed., 2011.
- Simmons, R., *Odd Girl Speaks Out: Girls Write about Bullies, Cliques, Popularity, and Jealousy*, Harcourt, 2004.
- Thompson, M. and Grace, C. O., *Best Friends, Worst Enemies: Understanding the Social Lives of Children*, Ballantine Books, 2001.
- Underwood, M. K., *Social Aggression among Girls*, Guilford, 2003.
- Wiseman, R., *Queen Bees and Wannabes: Helping Your Daughter Survive Cliques, Gossip, Boyfriends & Other Realities of Adolescence*, Three Rivers Press, 2002.
- Wiseman, R., with Rapoport, E., *Queen Bee Moms & Kingpin Dads: Dealing with the Difficult Parents in Your Child's Life*, Three River Press, 2006.

付録1 ウェブページ調査用フォーマットの一例

(ここに掲載したページのような約30問の選択肢質問からなる)

いじめや日常生活での悪意についての実態調査

いじめや日常生活での悪意についてのウェブ実態調査
実施：成城大学大学院文学研究科 後藤将之研究室

成城大学の教員紹介ページ：後藤将之 <http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/staff/goto.html>

■■■このウェブページへのアクセス、どうもありがとうございます。■■■

日ごろの対人関係で、悪意のある扱いをされた経験をお持ちの方は、とても多いです。それは、あいまいで、なかなか言葉に出せない話題のため、傷ついたまま、黙ったままの方も、たくさんおられます。

このアンケートでは、みなさんのお知り合いやみなさんの、そうした苦しい経験の実態を、個人名は全て匿名または仮名で、お教えてください。調査のシステムにより、回答者の匿名性は、確実に保証されています。この調査は、成城大学の大学院 後藤研究室が、このような対人コミュニケーション問題の研究と予防のために、大学院生と協力して実施しています。

以下の質問に、選択肢で答えていただき、最後にいちばん下にある「送信」ボタンを一度クリックしていただくと、そこまでの回答結果が、当研究室の受信専用アドレスへ送られます。発信元の情報は、こちらでは何も分からないようになっています。どうか安心して、ご協力ください。

ご回答の受付期間は、2011年9月30日までです。

下記のフォームにご記入の上、最後の「送信」ボタンを1度だけクリックしてください。送信されるのは、下記で選択・記入いただいた内容だけです。

質問中、「出来事」とは、「誰かが悪意のある扱いを受けた、まとまった1つの事件」という意味です。些細な出来事でも、傷ついた人がいた出来事ならば、対象になります。また、複数の出来事をご存知の方は、悉縮ですが、よろしければ、1回答=1出来事として、それぞれ記入し送信してください。なお、*マークが末尾についた質問はすべてご回答ください。

Q1-1 誰かがいじめや悪意のある扱いを受けた、まとまった事件についてうかがいます。それは主としていつ頃に起きた出来事でしたか？

Q1-2 それが起こった時、あなた自身の年齢はいくつくらいでしたか？

Q2-1 その出来事的首謀者は、あなた自身に近い人でしたか？

Q2-2 その出来事的首謀者の年齢は、その時いくつくらいでしたか？

Q2-3 その出来事的首謀者の性別は？

Q2-4 その出来事的首謀者は、しいて次の中から選ぶなら、どんな人でしたか？

Q3-1 その出来事の標的(悲しい思いをした人)は、あなた自身に近い人でしたか？

付録2 ペーパー版調査票・単純集計結果

いじめや日常生活での悪意についての実態調査 素集計

2011年8~9月

実施：成城大学大学院文学研究科 後藤将之研究室

〒157-8511 東京都世田谷区成城 6-1-20

成城大学の教員紹介ページ：(ここでは掲載を省略)

日ごろの対人関係で、悪意のある扱いをされた経験をお持ちの方は、とても多いです。それは、あまいで、なかなか言葉に出せないために、傷ついたまま、黙ったままの方も、たくさんおられます。

このアンケートでは、みなさんのお知り合いやみなさんの、そうした苦しい経験の実態を、個人名は全て匿名または仮名で、お教えてください。調査のシステムにより、回答者の匿名性は、確実に保証されています。この調査は、成城大学の大学院 後藤将之研究室が、このような対人コミュニケーション問題の研究と予防のために、大学院生と協力して実施しています。

回答は統計的に処理され、個人が問題になることはありません。安心してご協力ください。

Q1-1 誰かがいじめや悪意のある扱いを受けた、まとまった事件についてうかがいます。それは主としていつ頃に起きた出来事でしたか？ V2

	全体(実数)	日本国内	中国国内
1. 1960年代	1.9(2)	1.3(1)	3.7(1)
2. 1970年代	2.9(3)	3.9(3)	0.0(0)
3. 1980年代	2.9(3)	2.6(2)	3.7(1)
4. 1990年代	18.4(19)	21.1(16)	11.1(3)
5. 2000年代	55.3(57)	60.5(46)	40.7(11)
6. 2010年代	17.5(18)	10.5(8)	37.0(10)
DK/NA	1.0(1)	0.0(0)	3.7(1)

Q1-2 それが発生した時、あなた自身の年齢はいくつくらいでしたか？ V3

1. ~6歳	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)
2. ~9歳	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)
3. 10代前半(10~14歳)	35.9(37)	46.1(35)	7.4(2)
4. 10代後半(15~19歳)	12.6(13)	7.9(6)	25.9(7)
5. 20代前半(20~24歳)	10.7(11)	6.6(5)	22.2(6)
6. 20代後半(25~29歳)	9.7(10)	3.9(3)	25.9(7)

7. 30代前半 (30～34歳)	13.6(14)	13.2(10)	14.8(4)
8. 30代後半 (35～39歳)	9.7(10)	11.8(9)	3.7(1)
9. 40代前半 (40～44歳)	3.9(4)	5.3(4)	0.0(0)
10. 40代後半 (45～49歳)	1.9(2)	2.6(2)	0.0(0)
11. 50代	1.9(2)	2.6(2)	0.0(0)
12. 60代～	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)

Q2-1 その出来事的首謀者は、あなた自身に近い人でしたか？ V4

1. 自分自身	8.7(9)	7.9(6)	11.1(3)
2. 自分の直接の友人知人	65.0(67)	73.7(56)	40.7(11)
3. 自分のあまり近くない知り合いなど	15.5(67)	13.2(10)	22.2(6)
4. 自分には無関係な人	15.5(16)	5.3(4)	18.5(5)
DK/NA	1.9(2)	0.0(0)	7.4(2)

Q2-2 その出来事的首謀者の年齢は、その時いくつくらいでしたか？ V5

1. ～6歳	1.0(1)	1.3(1)	0.0(0)
2. ～9歳	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)
3. 10代前半 (10～14歳)	37.9(39)	48.7(37)	7.4(2)
4. 10代後半 (15～19歳)	8.7(9)	9.2(7)	7.4(2)
5. 20代前半 (20～24歳)	8.7(9)	3.9(3)	22.2(6)
6. 20代後半 (25～29歳)	11.7(12)	5.3(4)	29.6(8)
7. 30代前半 (30～34歳)	8.7(9)	7.9(6)	11.1(3)
8. 30代後半 (35～39歳)	8.7(9)	7.9(6)	11.1(3)
9. 40代前半 (40～44歳)	4.9(5)	5.3(4)	3.7(1)
10. 40代後半 (45～49歳)	2.9(3)	2.6(2)	3.7(1)
11. 50代	4.9(5)	5.3(4)	3.7(1)
12. 60代～	1.9(2)	2.6(2)	0.0(0)

Q2-3 その出来事的首謀者の性別は？ V6

1. 男性	43.7(45)	42.1(32)	48.1(13)
2. 女性	51.5(53)	56.6(43)	37.0(10)
3. 知らない、分からない	3.9(4)	0.0(0)	14.8(4)
DK/NA	1.0(1)	1.3(1)	0.0(0)

Q2-4 その出来事的首謀者は、しいて次の中から選ぶなら、どんな人でしたか？ V7

1. 人気者	50.5(52)	64.5(49)	11.1(3)
2. 特に目立たない人	17.5(18)	15.8(12)	22.2(6)
3. うまく適応できてない感じの人	17.5(18)	13.2(10)	29.6(8)
4. よく知らない人	12.6(13)	3.9(3)	37.0(10)

DK/NA 1.9(2) 2.6(2) 0.0(0)
Q3-1 その出来事の標的(悲しい思いをした人)は、あなた自身に近い人でしたか? V8

1. 自分自身	23.3(24)	26.3(20)	14.8(4)
2. 自分の直接の友人知人	53.4(55)	52.6(40)	55.6(15)
3. 自分のあまり近くない知り合いなど	18.4(19)	21.1(16)	11.1(3)
4. 自分には無関係な人	3.9(4)	0.0(0)	14.8(4)
DK/NA	1.0(1)	0.0(0)	3.7(1)

Q3-2 その出来事の標的の人の年齢は、その時いくつくらいでしたか? V9

1. ~6歳	1.0(1)	1.3(1)	0.0(0)
2. ~9歳	1.9(2)	2.6(2)	0.0(0)
3. 10代前半(10~14歳)	40.8(42)	51.3(39)	11.1(3)
4. 10代後半(15~19歳)	8.7(9)	7.9(6)	11.1(3)
5. 20代前半(20~24歳)	9.7(10)	3.9(3)	25.9(7)
6. 20代後半(25~29歳)	11.7(12)	3.9(3)	33.3(9)
7. 30代前半(30~34歳)	6.8(7)	7.9(6)	3.7(1)
8. 30代後半(35~39歳)	10.7(11)	11.8(9)	7.4(2)
9. 40代前半(40~44歳)	2.9(3)	2.6(2)	3.7(1)
10. 40代後半(45~49歳)	2.9(3)	2.6(2)	3.7(1)
11. 50代	2.9(3)	3.9(3)	0.0(0)
12. 60代~	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)

Q3-3 その出来事の標的の人の性別は? V10

1. 男性	33.0(34)	28.9(22)	44.4(12)
2. 女性	63.1(65)	68.4(52)	48.1(13)
3. 知らない, 分からない	1.9(2)	0.0(0)	7.4(2)
DK/NA	1.9(2)	2.6(2)	0.0(0)

Q3-4 その出来事の標的の人は、しいて次の中から選ぶなら、どんな人でしたか? V11

1. 人気者	37.9(39)	40.8(31)	29.6(8)
2. 特に目立たない人	30.1(31)	30.3(23)	29.6(8)
3. うまく適応できてない感じの人	22.3(23)	21.1(16)	25.9(7)
4. よく知らない人	7.8(8)	5.3(4)	14.8(4)
DK/NA	1.9(2)	2.6(2)	0.0(0)

Q5 その出来事について、あなたはどのようにやって知りましたか? V12

1. 自分自身が直接に体験した	26.2(27)	28.9(22)	18.5(5)
2. 自分自身が直接に見聞きした	44.7(46)	52.6(40)	22.2(6)
3. 自分自身が事件の関係者から聞いた	15.5(16)	6.6(5)	40.7(11)

4. 言い伝えやウワサなどで聞いた	8.7(9)	9.2(7)	7.4(2)
5. 新聞やテレビなどで見聞きした	1.0(1)	0.0(0)	3.7(1)
6. インターネットで見聞きした	1.9(2)	0.0(0)	7.4(2)
DK/NA	1.9(2)	2.6(2)	0.0(0)

Q6 その出来事は、主にどんな場所で起きていましたか？ V13

1. 家庭内	3.9(4)	1.3(1)	11.1(3)
2. 学校内や学校同士	61.2(63)	69.7(53)	37.0(10)
3. 学校や職場の寮や社宅など	22.3(23)	19.7(15)	29.6(8)
4. ご近所の町内	4.9(5)	2.6(2)	11.1(3)
5. クラブやサークル	2.9(3)	3.9(3)	0.0(0)
6. スポーツなどの練習場や競技場	1.0(1)	0.0(0)	3.7(1)
7. 旅行先や国内外の出張先・赴任先	2.9(3)	1.3(1)	7.4(2)
DK/NA	0.0(0)	1.3(1)	0.0(0)

Q7 その出来事は、どれくらいの期間、続いていましたか？ V14

1. 1日から数日	12.6(13)	2.6(2)	40.7(11)
2. 数週間	17.5(18)	13.2(10)	29.6(8)
3. 数ヶ月	30.1(31)	35.5(27)	14.8(4)
4. 1~3年間	31.1(32)	39.5(30)	7.4(2)
5. 3年間以上	8.7(9)	9.2(7)	7.4(2)

Q8-1 その出来事で、よく使われていた手口を3つ選んでください。その1. V15

1. 標的がない時に、かげ口を言う	30.1(31)	26.3(20)	40.7(11)
2. 標的の悪いウワサを流す	7.8(8)	9.2(7)	3.7(1)
3. 標的がいても、黙殺や無視する	13.6(14)	13.2(10)	14.8(4)
4. 標的を仲間に入れない	14.6(15)	18.4(14)	3.7(1)
5. 標的をみんなの行事などにさそわない	3.9(4)	2.6(2)	7.4(2)
6. 悪口をブログやノートに書く	2.9(3)	3.9(3)	0.0(0)
7. 標的が不快になるほど計画的にからかう	16.5(17)	18.4(14)	11.1(3)
8. 肉体的な暴力を与える	3.9(4)	5.3(4)	0.0(0)
9. あからさまな脅しをする	2.9(3)	1.3(1)	7.4(2)
10. 金品をとる、こわす	3.9(4)	1.3(1)	11.1(3)

Q8-2 その出来事で、よく使われていた手口を3つ選んでください。その2：上のQ8-1以外のものを選んでください。 V16

1. 標的がない時に、かげ口を言う	13.6(14)	15.8(12)	7.4(2)
2. 標的の悪いウワサを流す	23.3(24)	19.7(15)	33.3(9)
3. 標的がいても、黙殺や無視する	16.5(17)	17.1(13)	14.8(4)

4. 標的を仲間に入れない	11.7(12)	15.8(12)	0.0(0)
5. 標的をみんなの行事などにさそわない	7.8(8)	7.9(6)	7.4(2)
6. 悪口をブログやノートに書く	1.9(2)	1.3(1)	3.7(1)
7. 標的が不快になるほど計画的にからかう	2.9(3)	3.9(3)	0.0(0)
8. 肉体的な暴力を与える	4.9(5)	3.9(3)	7.4(2)
9. あからさまな脅しをする	6.8(7)	6.6(5)	7.4(2)
10. 金品をとる, こわす	2.9(3)	2.6(2)	3.7(1)
DK/NA	7.8(8)	5.3(4)	14.8(4)

Q8-3 その出来事で、よく使われていた手口を3つ選んでください。その3:上のQ8-1とQ8-2以外のものを選んでください。 V17

1. 標的がない時に、かげ口を言う	12.6(13)	13.2(10)	11.1(3)
2. 標的の悪いウワサを流す	9.7(10)	10.5(8)	7.4(2)
3. 標的がいても、黙殺や無視する	17.5(18)	14.5(11)	25.9(7)
4. 標的を仲間に入れない	14.6(15)	17.1(13)	7.4(2)
5. 標的をみんなの行事などにさそわない	12.6(13)	13.2(10)	11.1(3)
6. 悪口をブログやノートに書く	2.9(3)	1.3(1)	7.4(2)
7. 標的が不快になるほど計画的にからかう	6.8(7)	9.2(7)	0.0(0)
8. 肉体的な暴力を与える	3.9(4)	2.6(2)	7.4(2)
9. あからさまな脅しをする	5.8(6)	6.6(5)	3.7(1)
10. 金品をとる, こわす	2.9(3)	2.6(2)	3.7(1)
DK/NA	10.7(11)	9.2(7)	14.8(4)

Q8-ALL その出来事で、よく使われていた手口を3つ選んでください。上記の合計

1. 標的がない時に、かげ口を言う	56.3(58)	55.3(42)	59.2(16)
2. 標的の悪いウワサを流す	40.8(42)	39.4(30)	44.4(12)
3. 標的がいても、黙殺や無視する	47.6(49)	44.8(34)	55.5(15)
4. 標的を仲間に入れない	40.9(42)	51.3(39)	11.1(3)
5. 標的をみんなの行事などにさそわない	35.0(25)	23.7(18)	25.9(7)
6. 悪口をブログやノートに書く	7.7(8)	6.5(5)	11.1(3)
7. 標的が不快になるほど計画的にからかう	26.2(27)	31.5(24)	11.1(3)
8. 肉体的な暴力を与える	12.7(13)	11.8(9)	14.8(4)
9. あからさまな脅しをする	15.5(16)	14.5(11)	18.5(5)
10. 金品をとる, こわす	9.7(10)	6.5(5)	18.5(5)

Q9 その首謀者のグループは、何人くらいで構成されておりましたか？ V18

1. 首謀者1名だけ	20.4(21)	13.2(10)	40.7(11)
2. 2~3名	39.8(41)	39.5(30)	40.7(11)

3. 4～5名	22.3(23)	25.0(19)	14.8(4)
4. 6～9名	7.8(8)	10.5(8)	0.0(0)
5. 10名以上	6.8(7)	9.2(7)	0.0(0)
DK/NA	2.9(3)	2.6(2)	3.7(1)

Q10-1 その首謀者のグループには、いつも首謀者と一緒について、手助けをするような人がいましたか？ V19

1. いた	69.9(70)	72.4(55)	63.0(17)
2. いなかった	10.7(11)	7.9(6)	18.5(5)
3. 知らない, 分からない	16.5(17)	15.8(12)	18.5(5)
DK/NA	2.9(3)	3.9(3)	0.0(0)

Q10-2 その手助けをする人は、その出来事に加担していましたか？ V20

1. 加担していた	63.1(65)	67.1(51)	51.9(14)
2. 加担していなかった	10.7(11)	5.3(4)	25.9(7)
3. この出来事には加担していなかった (他には加担していた)	1.9(2)	2.6(2)	0.0(0)
4. 知らない, 分からない	19.4(20)	18.4(14)	22.2(6)
DK/NA	4.9(5)	6.6(5)	0.0(0)

Q10-3 その手助けをする人の性別は？ V21

1. 男性	27.2(28)	26.3(20)	29.6(8)
2. 女性	43.7(45)	46.1(35)	37.0(10)
3. 知らない, 分からない	18.4(19)	13.2(10)	33.3(9)
DK/NA	10.7(11)	14.5(11)	0.0(0)

Q10-4 その手助けをする人の年齢は、その時いくつくらいでしたか？ V22

1. ～6歳	1.0(1)	1.3(1)	0.0(0)
2. ～9歳	1.9(2)	2.6(2)	0.0(0)
3. 10代前半 (10～14歳)	35.9(37)	44.7(34)	11.1(3)
4. 10代後半 (15～19歳)	10.7(11)	9.2(7)	14.8(4)
5. 20代前半 (20～24歳)	9.7(10)	5.3(4)	22.2(6)
6. 20代後半 (25～29歳)	8.7(9)	2.6(2)	25.9(7)
7. 30代前半 (30～34歳)	7.8(8)	5.3(4)	14.8(4)
8. 30代後半 (35～39歳)	6.8(7)	7.9(6)	3.7(1)
9. 40代前半 (40～44歳)	1.9(2)	1.3(1)	3.7(1)
10. 40代後半 (45～49歳)	1.9(2)	1.3(1)	3.7(1)
11. 50代	1.9(2)	2.6(2)	0.0(0)
12. 60代～	1.0(1)	1.3(1)	0.0(0)

DK/NA	10.7(11)	14.5(11)	0.0(0)
Q11-1 その首謀者のグループには、他人の情報を集めて、時機をみはからってデマを流す人がいましたか？ V23			
1. いた	36.9(38)	39.5(30)	29.6(8)
2. いなかった	22.3(23)	22.4(17)	22.2(6)
3. 知らない、分からない	35.9(37)	32.9(25)	44.4(12)
DK/NA	4.9(5)	5.3(4)	3.7(1)
Q11-2 そのデマを流す人は、その出来事に加担していましたか？ V24			
1. 加担していた	32.0(33)	35.5(27)	22.2(6)
2. 加担していなかった	16.5(17)	6.6(5)	44.4(12)
3. この出来事には加担していなかった（他には加担していた）			
	1.0(1)	1.3(1)	0.0(0)
4. 知らない、分からない	38.8(40)	40.8(31)	33.3(9)
DK/NA	11.7(12)	15.8(12)	0.0(0)
Q11-3 そのデマを流す人の性別は？ V25			
1. 男性	18.4(19)	14.5(11)	29.6(8)
2. 女性	29.1(30)	28.9(22)	29.6(8)
3. 知らない、分からない	38.8(40)	39.5(30)	37.0(10)
DK/NA	11.7(12)	17.1(13)	3.7(1)
Q11-4 そのデマを流す人の年齢は、その時いくつくらいでしたか？ V26			
1. ～6歳	2.9(3)	2.6(2)	3.7(1)
2. ～9歳	1.0(1)	1.3(1)	0.0(0)
3. 10代前半（10～14歳）	22.3(23)	27.6(21)	7.4(2)
4. 10代後半（15～19歳）	6.8(7)	7.9(6)	3.7(1)
5. 20代前半（20～24歳）	6.8(7)	2.6(2)	18.5(5)
6. 20代後半（25～29歳）	10.7(11)	5.3(4)	25.9(7)
7. 30代前半（30～34歳）	5.8(6)	5.3(4)	7.4(2)
8. 30代後半（35～39歳）	8.7(9)	7.9(6)	11.1(3)
9. 40代前半（40～44歳）	1.0(1)	0.0(0)	3.7(1)
10. 40代後半（45～49歳）	1.0(1)	0.0(0)	3.7(1)
11. 50代	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)
12. 60代～	3.9(4)	3.9(3)	3.7(1)
DK/NA	29.1(30)	35.5(27)	11.1(3)

Q12-1 その首謀者のグループには、首謀者たちの使い走りのような役目の人がいましたか？
V27

1. いた	30.1(31)	32.9(25)	22.2(6)
2. いなかった	33.0(34)	31.6(24)	37.0(10)
3. 知らない、分からない	29.1(30)	25.0(19)	40.7(11)
DK/NA	7.8(8)	10.5(8)	0.0(0)

Q12-2 その使い走りの人は、その出来事に加担していましたか？ V28

1. 加担していた	32.0(33)	35.5(27)	22.2(6)
2. 加担していなかった	17.5(18)	13.2(10)	29.6(8)
3. この出来事には加担していなかった（他には加担していた）	1.9(2)	1.3(1)	3.7(1)
4. 知らない、分からない	34.0(35)	30.3(23)	44.4(12)
DK/NA	14.6(15)	19.7(15)	0.0(0)

Q12-3 その使い走りの人の性別は？ V29

1. 男性	18.4(19)	15.8(12)	25.9(7)
2. 女性	25.2(16)	26.3(20)	22.2(6)
3. 知らない、分からない	38.8(40)	34.2(26)	51.9(14)
DK/NA	17.5(18)	23.7(18)	0.0(0)

Q12-4 その使い走りの人の年齢は、その時いくつくらいでしたか？ V30

1. ～6 歳	1.9(2)	2.6(2)	0.0(0)
2. ～9 歳	1.9(2)	2.6(2)	0.0(0)
3. 10 代前半 (10～14 歳)	20.4(21)	23.7(18)	11.1(3)
4. 10 代後半 (15～19 歳)	7.8(8)	5.3(4)	14.8(4)
5. 20 代前半 (20～24 歳)	7.8(8)	3.9(3)	18.5(5)
6. 20 代後半 (25～29 歳)	8.7(9)	5.3(4)	18.5(5)
7. 30 代前半 (30～34 歳)	5.8(6)	3.9(3)	11.1(3)
8. 30 代後半 (35～39 歳)	6.8(7)	6.6(5)	7.4(2)
9. 40 代前半 (40～44 歳)	2.9(3)	1.3(1)	7.4(2)
10. 40 代後半 (45～49 歳)	0.0(0)	0.0(0)	0.0(0)
11. 50 代	1.9(2)	2.6(2)	0.0(0)
12. 60 代～	1.0(1)	1.3(1)	0.0(0)
DK/NA	33.0(34)	40.8(31)	11.1(3)

Q13 その出来事について、下の枠内に、少し具体的に説明してください。個人の固有名は出さないでください。（例：AさんがBさんと共謀し、人のウワサに詳しいCさんに、「山田さん（仮名）は嘘つきだ」というデマをサークル内に流させて、仮名・山田さんを追いつめて辞めさせた、等） V31

Q14 その首謀者グループが、何かのきっかけで、今度は悪意を受ける立場に変わる、といった出来事がありましたか？ もしあった場合、その出来事についても、これと同じように、その詳細を、もう一つのアンケート用紙にご記入ください。 V32

1. あった	23.3(24)	22.4(17)	25.9(7)
2. なかった	26.2(27)	26.3(20)	25.9(7)
3. 知らない、分からない	34.0(35)	35.5(27)	29.6(8)
DK/NA	16.5(17)	15.8(12)	18.5(5)

質問は以上です。ご協力どうもありがとうございました。

A Symbolic Interactionist Study of Social Aggression: Brief Review of Past Researches and Results from a Preliminary Survey

Goto Masayuki

Abstract

This paper is intended to be an introductory essay for a series of research papers by Seijo University's graduate students, all tried to analyze the phenomenon of so-called "social aggression" or "relational aggression," based on the same small-sized (of about 100 samples) web-page questionnaire-based social research, conducted in the summer of 2011. In this introductory essay, the author's aims were (1) to review and explain the research history of social aggression, examining some representative research reports written in the past 20 years, and (2) to briefly show-case the results of our web-based symbolic interactionist social research, examining some basic tendencies found in the responses of various age groups and in Japanese and Chinese respondents. Among many, it will be discussed that social aggressive behaviors are not limited to young girls, but can be found among elder women and young men also, though the occurrence is less frequent than those among young women. Each topic will be detailed in the individual paper by graduate student, which will be published on a separate volume of Seijo University's graduate school student journal in 2012.

Keywords : social aggression, symbolic interaction, empirical research, web-based research